

「崇拜」の漢字音の変化をめぐって

肖 江 楽

1. はじめに

漢字の字音として普通に知られているのは呉音・漢音のほか、唐音や慣用音がある。このうち、最も早くに伝来したのは、六朝時代中国の長江下流域の呉地方の発音が百済を経由して伝わった呉音である。これに次いで伝わったのが漢音で、隋唐の洛陽あるいは長安の標準音に基づくものである。唐音は、13世紀以降、禅宗の伝来や交易によって伝わった音である。慣用音は漢字音の一種で、中国の字音と著しく相違した字音、または甚だしい過誤によってできた字音であるが、日本における習慣によって広く社会的に用いられ、慣習上で正当と認められているものである⁽¹⁾。以上の字音は、時代に伴い、互いに交代することも少なくない。中世以降、特に近代において、漢字音の交替が頻繁に行われたことは森岡健二(1991)によって指摘されている⁽²⁾。

本稿では、漢語「崇拜」を取り挙げて、まずこの訳語がどのように日本近代語彙体系に入ったのか、そして発音がどのような変化を辿ったのか、さらにいつ頃「スウハイ」読みに着定していったのかを考察することにしたい。

2. 辞書における「崇拜」の記述

『日本国語大辞典』(第2版)の「崇拜」には次のように見える。(ここでは、『日国』と呼ぶことにする)

(1) あこがれの気持で、ある人を心から敬うこと。

* 将来之日本 [1886] 〈徳富蘇峰〉九「学校の教育に於て一週の六日間はアチルス(ツロイ戦争の勇将)をば英雄として崇拜せしめ」

* 園遊会 [1902] 〈国木田独歩〉三「君は君の好む所の人物を崇拜(スウハイ)しろ」

* 破戒 [1906] 〈島崎藤村〉一・二「まあ君のは愛読を通り越して崇拜の方だ」

* 南斉書 - 百官志「左僕射、領殿中主客二曹事、〈略〉諸吉慶瑞応、〈略〉臨軒崇拜。」

(2) 宗教的対象の前に立ち、自己の有限性、依存性、卑小性、無力性を自覚したり、あるいは自己の罪業の深さとその自力による救済不能を自覚したりすることから、宗教的対象に自己の救済一切をまかせ願求する心をもって、対象を敬いあがめること。

* 公議所日誌一五中・明治二年 [1869] 五月「上は神仏を崇拜し、下は英武の勁力を尽し」

* あむばるばりあ [1933] 〈西脇順三郎〉拉典哀歌・catullus「プリアープスよ、

汝に此の叢林を献ずる（略）その町々では汝を崇拜する」

語誌

(2)について) 中国では近代になって、英華字書で、adore・adorer の訳語にあてられ、宗教的な意味合いが加わった。日本では明治までに用例が確認できず、中国の洋学書、漢訳聖書と共に日本語に入ってきたのではないかと思われる。

以上の辞書記述によって、「崇拜」は中国の『南齊書・百官志』に確認できる古典漢語であるが、日本では『公議所日誌』の「上は神仏を崇拜し、下は英武の勁力を尽し」(1869)を初出用例としている。一方、『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』(2007)では、1862年堀達之助ら編著『英和对訳袖珍辞書』には「Adoration. 念スルコト、崇拜」といった用例が取り上げられている⁽³⁾。この用例は、確認した範囲では最も古いものである。また、語誌を見ると、「崇拜」は「中国の洋学書、漢訳聖書と共に日本語に入ってきたのではないかと思われる」と記されているが、その具体的な伝播ルートが明らかにされていない。このような近代日中語彙の交流は、ただ言葉だけでなく、文化上の浸透・影響の関係もあるため、訳語の借用経路を明確に把握すべきであろう。

3. 借用語の経路——英華字典を中心に

『日国』(第2版)の語誌により、「崇拜」は19世紀宣教師が編纂した英華字典から借用された訳語の可能性があると明記している。前に述べたように、近代英和辞書の嚆矢とされる堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』は、中国から伝来したモリソン、ウィリアムス、メドハーストの辞書から多くの訳語を援引したことは既に遠藤智夫の研究に指摘がある⁽⁴⁾。従って、19世紀宣教師に編纂された英華辞典、とりわけメドハーストの辞書に収録されたか否かを調査しておかなければならない。本稿では、台湾中央研究院近代史研究所英華字典資料庫⁽⁵⁾を利用しながら検索した。その結果は〔表1〕にまとめた。

〔表1〕英華字典における「崇拜」

英華辞典	「崇拜」の意味記載
モリソン馬礼 (1822)	1. Worship. worship gods 崇拜
ウィリアムス衛三畏 (1844)	1. Adore. 崇拜 2. Worship. to 拜、崇拜
メドハースト麦都思 (1847)	1. TO Adore. to worship with external homage 伏拜、 磕首拜、下首拜、跪拜、崇拜 2. TO Celebrate. to celebrate worship 拜神、崇拜上 帝、奉事天主 3. TO Worship. 拜、敬、禮崇、崇拜

ロプシャイト羅存徳 (1866~1869)	1. Adore. to 拜、崇拜 2. Celebrate. to celebrate divine service 拜上帝、崇拜上帝、參拜上帝 3. Worship. to pay divine honors to 拜、崇拜、嵩拜、敬拜 4. Adorable. worthy of divine honors 可崇拜、堪受拜、本應受拜、當納拜 5. Adoration. 拜、崇拜 6. Adorableness. 可崇拜者、堪受拜者 7. Adorer. worshipper 拜者、崇拜者 8. Worshiper. 拜者、崇拜者
井上哲次郎増訂英華字典 (1883~1884)	1. Celebrate. to celebrate divine service 彰聲名、拜上帝、崇拜上帝 2. Worship. To pay divine honors to 拜、崇拜、嵩拜、敬拜 3. Adorable. Worthy of divine honours 可崇拜、堪受拜、堪拜的、可崇敬的、本應受拜、當納拜 4. Adorer. Worshipper 拜者、崇拜者

上の表からみると、19世紀の英華字典では、「崇拜」はモリソン『英華字典』に Worship の訳語として登場している。そして、1844年刊行されたウィリアムス『英華字典』には、モリソンの辞書の上に、新たに「Adore. 崇拜」の訳語が追加されている。これらの当て方は後にメドハーストの辞書にすべて継承されたことが分かる。先行研究によって、『英和对訳袖珍辞書』初版には、「Adoration. 念スルコト、Adore-ed-ing. 拝スル」という当て方があったことを合わせて考えると、「崇拜」はメドハースト『英華字典』を通して、日本に入ってきたことが窺われる。ただ、当時の「崇拜」は、「ソウハイ」と読まれていたのか、「シュウハイ」と読まれていたのか、あるいは現代のように「スウハイ」と読まれていたのか、ルビが振られていなかったため、にわかには判断することはできない。

また、1866年のロプシャイト『英華字典』には、訳語「崇拜」も多く用いられている。これらの訳語は後に井上哲次郎の『増訂英華字典』にも踏襲されている⁽⁶⁾。ここで明らかな点は、「崇拜」は少なくとも19世紀中葉には、いくつかの見出し語の訳語として定着し、そして英華字典の伝播を経由して近代日本語体系に流入したということである。

4. 「崇拜」の読み方の歴史変化

飛田良文・惣郷正明編『明治のことば辞典』(1986)⁽⁷⁾では、「崇拜」の読み方の歴史の変化が詳しく紹介されている。その詳細は下記の通りである。

- ①「文典理字地学三書字類・明5」【ソウハイ】adore.
- ②「和英大辞典・明29」【sōhai】(chin) Worship. -suru,

- T0 worship, adore. Eiyūsōhai, 英雄崇拜、hero worship.
- ③「ことばの泉・明 31」【しうはい】信じあがむること。すうはい。
- ④「新編熟語字典・明 33」【ソウハイ】アガメオガムライフ。
- ⑤「和仏大辞典・明 37」【sōhai】(agame-ogamu)
Honneur, respect, culte: eiyū-, Culte di aux héros: -suru. / 【sūhai】
Culte, vénération。
- ⑥「訂増中等作文辞典・明 38」【そうはい】あがむること。
- ⑦「仏和会話大辞典・明 38」【sōhai】adoration。
- ⑧「新訳和英辞典・明 42」【shūhai】worship, veneration(尊崇)。/【sūhai】shūhai。/
【sōhai】shūhai。
- ⑨「日本語類語大辞典・明 42」【スウハイ】あがめたふとむ。しゅふはい。
- ⑩「類別索引書翰辞典・明 43」【すうはい】あがむること。尊び拜むこと。/【そ
うはい】ありがたがること。
- ⑪「机上宝典誤用便覧・明 44」【しゅうはい、すうはい】(上略) シュウハイと読
むが正しい。尤も極く普通にはスウハイと読み慣れはして通っているから、そ
れでもよいが、ソウハイは同じ誤でも聞き苦しい。
- ⑫「辞林・明 44」【しゅうはい】あがめたふとぶこと。帰依すること。信仰するこ
と。そうはい。「英雄一」。/【すうはい】【しゅうはい】に同じ。/【そうはい】
あがめたふとぶこと。帰依すること。信仰すること。
- ⑬「模範英和辞典・明 44」【シュウハイ】adoration・cult・worship・veneration。
- ⑭「大辞典・明 45」【しうはい】アガメテ拜スルコト。=ソウハイ。/【すうはい】
そうはいノ読みアヤマリ。/【そうはい】ソの人、又ハ物ヲアガメ礼拜スルコ
ト。○転ジテスベテ、アガメテ心カラ仰ギタツトブコト。一「英雄そうはい」。
- ⑮「新式辞典・大 1」【そうはい】あがめたふとぶこと。甚だしく尊崇すること。
- ⑯「ローマ字索引国漢辞典・大 4」【sōhai】あがめること。Sū-hai ともよむ。正
しくは shū-hai 「英雄崇拜」。
- ⑰「ローマ字びき国語辞典・大 4」【shūhai】あがめ尊ぶこと、そうはい、すうは
い、Worship。

▽語形 シュウハイ、スウハイ、ソウハイの読み方がある。「崇」は『広漢和辞典』
によると、漢音シュウ、呉音ジュ、漢音ソウ、呉音ズ。慣用音スウとある。
スウハイは、国木田独歩の『園遊会』(明治 35) 三に「君は君の好む所の人物を
崇^{すうはい}拜しろ、」とある。

以上の記述を見ると、まず気になるのは「崇拜」の読み方である。明治 5 年 (1872)
から「ソウハイ」と読まれて以降、大正 4 年 (1914) までの辞書で、「崇拜」は「シュ
ウハイ」、「スウハイ」、「ソウハイ」の三通りの発音が記されている。そして、『ことば
の泉』(1898) に収録される「スウハイ」が初出用例とされている。ただ、上記の『広
漢和辞典』における「崇」の字音の認定には注意しなければならない。「崇」の漢字音

については本稿の後半の部分に改めて論考することにする。

これ以降、「崇拜」の読みはどのように変化したか、いつ定着したか、この問題を解決するため、先行研究を踏まえながら、その他の漢語辞典、漢和辞典および国語辞典を調べることにした。調査する際に「崇拜」と「崇」を含む漢語読みの変化にも注目している。その結果は〔表2〕の通りである。

〔表2〕 漢語辞典、漢和辞典および国語辞典における「崇拜」

文 献	刊 年	意味記載
漢語新字引	1876	尊崇 (ソンスウ)
御布令新聞漢語必用文明いろは字引	1877	尊崇 (ソンスウ) タットピアガメル。 崇敬 (ソウケイ) アガメアヤマウ。
新選漢語小字典	1877	崇奉 (ソウホウ) 崇信 (ソウシン)
自由熟字在 引早引	1878	崇敬 (ソウケイ)
必携熟字集	1879	崇儉 (ソウケン) ケンヤクタットブ 崇敬 (ソウケイ) ウヤマヒタットブ
新撰普通漢語字引大全	1884	尊崇 (ソンスウ) 崇敬 (ソウケイ)
言海	1891-93	崇敬 (ソウケイ) アガメウヤマフコト 尊崇 (ソンスウ) タフトピアガムル
漢語熟字典	1892	尊崇 (ソンスウ) 崇敬 (ソウケイ)
新撰漢語字引 改訂音訓	1894	尊崇 (ソンスウ) アガメタットブ
故事熟語字典	1990	崇拜 (ソウハイ) ココロカラアガメタテマツルコト。アガメタテマツリ、オガムコト。
漢語故諺熟語大辞林	1901	崇拜 (ソウハイ) ココロカラアガメタテマツルコト。アガメタテマツリ、オガムコト。
新編漢語辞林	1904	崇拜 (ソウハイ) アガメテ、オガム。
作文新辞典 漢語国語	1906	① 崇拜 (スウハイ) あがめうやまふこと。 ② 崇拜 (ソウハイ) あがむること。
辞海 (郁文舎編)	1914	① しゅうはい「崇拜」名尊みあがむること。帰依すること。「祖先一」 ② すうはい「崇拜」名しゅうはいに同じ。 ③ そうはい「崇拜」名しゅうはいに同じ。
大日本国語辞典 (上田万年・松井簡治編)	1916	① しゅうはい崇拜 あがめたふとぶこと。信仰。 ② すうはい崇拜 しゅうはい崇拜に同じ
大字典 (啓成社)	1917	崇拜 (シュウハイ・ソウハイ) あがめたふとぶ。あがめをがむ。齊書「臨軒崇拜。」
言泉 (落合直文)	1922	① しゅうはい崇拜 (名) ② すうはい (崇拜) に同じ
熟語集成漢和大辞典	1922	崇拜 (シュウハイ) 信じあがむること

(古川喜九郎)		
大漢和辞典 (服部宇之吉)	1925	崇拜(シュウハイ・スウハイ) あがめたつとぶこと。うやまひをがむこと。崇敬
大言海	1932	① すうはい(名) 崇拜。 ② シュウハイ(崇拜)ノ條ヲ見ヨ
大辞典(平凡社)	1934-36	ソーハイ崇拜(スウハイ)
辞苑	1935	すうはい 【崇拜】 (名) ① あがめうやまふこと。 ② 【宗】 宗教的対象を崇敬し、之に歸依する心的態度と外的表現の総称。信仰すること。歸依すること。
言苑	1938	すうはい 【崇拜】 ① あがめうやまうこと。 ② 【宗】 神佛を崇敬し、之に依頼する態度。歸依(キエ)すること。
明解国語辞典	1943	すうはい 【崇拜】 ⊖あがめうやまうこと。 ⊖歸依(キエ)・信仰すること。 そおはい(崇拜) ソウハイ(名) すうはい。
明解国語辞典(改訂版)	1952	すうはい「崇拜」(名・他サ) ⊖あがめうやまうこと。 ⊖歸依(キエ)・信仰すること。
辞海(三省堂)	1952	すうはい 【崇拜】 (名) ⊗ あがめとうとぶこと。尊敬し歸依(きえ)すること。「余の一する人物」一・しゃ 【一者】 ㊦(名) 崇拜している人。「彼は隆盛の一だ」
広辞苑初版	1955	すうはい 【崇拜】 ①あがめうやまうこと。② 【宗】 (worship) 宗教的対象を崇敬し、これに歸依(きえ)する心的態度とその外的表現との総称。信仰。
新版広辞林	1958	①しゅうはい「崇拜」(名) すうはい ②すうはい「すうはい」(名) あがめとうとぶこと。しゅうはい。「一者」
国語中辞典(三省堂)	1967	①しゅうはい「崇拜」すうはい ②すうはい「崇拜」 <small>スル</small> 理想の人として尊ぶこと。「野口英世の一者」
広辞林(第5版)	1973	すうはい 【崇拜】 <small>スル</small> 理想の人として尊ぶこと。しゅうはい 【崇拜】 すうはい

角川国語中辞典	1973	すうはい【崇拝】ス「スーハイ体・サ変あがめ敬うこと。宗教的対象を崇敬し、帰依すること。「英雄一」「偶像一」
大漢和辞典（修訂版）	1984-86	【崇拝】スウハイ①あがめ拝する。尊敬する。（南齊書 - 百官志「左僕射、領二殿中主客二曹事一、其諸吉慶瑞応衆拝、災異賊發衆變、臨レ軒崇拝。②ch 'ung2pai4」） 帰依する。信仰する。
広辞苑（第5版）	1998	すうはい【崇拝】 ①あがめうやまうこと。「英雄一」「舶来品一」 ②【宗】(worship) 宗教的対象を崇敬し、これに帰依(きえ)する心的態度とその外的表現との総称。信仰。「神を一する」

表の前半部分にいくつかの漢語辞典を挙げているが、この類の辞書は、すべての漢語に読み仮名が記されているため、発音がどのように変化していったのかを確認できる点で貴重である。例えば、「崇」という漢字は「スウ」で初めて読まれた相対的に早い用例は、『漢語新字引』（1876）と『御布令新聞漢語必用文明いろは字引』（1877）に見られる。そして、1900年の『故事熟語字典』には「崇拝」（ソウハイ）が収録されている。使用頻度からみると、当初「ソウハイ」が多くの辞書に収録され、主な読み方として使われた様子が窺われる。それ以降、1917年の『大字典』（啓成社）、1922年の『言泉』（落合直文）、1922年の『熟語集成漢和大辞典』（古川喜九郎）、1925年の『大漢和辞典』（服部宇之吉）には、「シュウハイ」、「スウハイ」、「ソウハイ」の三種の発音が記されている。

一方、1934～1936年の『大辞典』（平凡社）以降の辞書では、読み「ソウハイ」が消えつつあり、「シュウハイ」と「スウハイ」が多く使われた傾向が顕著に見受けられる。特に、1935年の『辞苑』、1938年の『言苑』、1952年の『明解国語辞典』（改訂版）、1955年の『広辞苑初版』には、「スウハイ」読みしか収録されていないようである。後に刊行された『新版広辞林』（1958）と三省堂編『国語中辞典』（1967）には、再び「シュウハイ」が見えるが、1973年以降の漢和辞書・国語辞書では、ほとんど「スウハイ」と記されているため、辞書類における「崇拝」の読みはこの時期に定着したと言える。

5. 新聞記事における「崇拝」

辞書を調査した範囲では、英華字典を通して日本語に入ってきた「崇拝」は「ソウハイ」、「シュウハイ」、「スウハイ」の読み方があったが、1973年以降になると、辞書類では「スウハイ」に落ち着く。一方、新聞記事に「崇拝」がどのように記されたか、ここでは明治大正期の新聞を確認してみよう。明治大正期の新聞は総ルビであること

から、その使用例とともに読み方も知ることができる点で有益である。

そこで、朝日新聞記事データベース（朝日新聞「聞蔵Ⅱビジュアル版」）を検索し、明治・大正期の「崇拜」の使用例とルビを調べ、その結果を以下にまとめた。（収集した用例のすべてを列挙しないが、年の古い順にいくつかを挙げる。）

- ①. 今日の所謂有志の間に於いては最早斯の如き単純なる英雄^{そうはい}崇拜^{そうはい}の跋扈を許さざるなり（1888. 11. 9 朝刊）
- ②. 彼れ或種の社会が徒らに外国を崇拜^{そうはい}し外人を崇拜^{そうはい}し取を直さず
（1889. 9. 15 朝刊）
- ③. 常には偏に泰西の俗を崇拜^{そうはい}し我が美風を嘲けり（1890. 11. 5 朝刊）
- ④. 所謂外国崇拜^{そうはい}者に外ならずして徒らに外国の皮想を察し（1891. 5. 5 朝刊）
- ⑤. 亜細亜人なりと拳証能く悉す且つ終に頭蓋崇拜^{そうはい}説を打破して
（1892. 1. 24 朝刊）
- ⑥. 英雄崇拜^{そうはい}論（1893. 12. 21 朝刊）
- ⑦. 露韓密約を結ばんとし朝鮮に露国崇拜^{そうはい}党を作りし（1894. 2. 9 朝刊）
- ⑧. 尚頑固党の巢窟ありて支那を崇拜^{そうはい}し居れば（1895. 5. 3 朝刊）
- ⑨. 是れ英雄崇拜^{そうはい}の極論に激して發生したる反対の極論のみ（1896. 2. 5 朝刊）
- ⑩. 欧風崇拜^{そうはい}の余波は未だ全く除かず特に上流社会若しくは学者社会に在ては今尚甚だしきものあり（1897. 7. 28 朝刊）
- ⑪. 英雄崇拜^{そうはい}（1898. 9. 20 朝刊）

用例①のように、「崇拜」は 1888 年から朝日新聞に使われ始め、当時「ソウハイ」と読まれている。この読み方は 1898 年まで使われている。しかし、1899 年になると、崇拜の「ソウハイ」読みが消え、「スウハイ」へと転換する傾向が表れつつある。

- ⑫. 西洋崇拜^{すうはい}の思想は侯の心中に場所を取り随つて模擬的政治の根柢をぞ為しにける（1899. 8. 15 朝刊）
- ⑬. マリヤを崇拜^{すうはい}するは新教の真理に反するもの二項に在て（1901. 7. 1 朝刊）

- ⑭. 徂徠^{そらい}崇^{すうはい} 拝の石子場所柄をも憚らず (1902. 5. 8 朝刊)
- ⑮. 蝙蝠傘を振り上げてゴルキー^{すうはい}崇^{すうはい} 拝者を打据ゑたるに後者も之に劣らず叩き返し (1903. 3. 16 朝刊)
- ⑯. 実に日本人は悉く先祖崇^{すうはい} 拝者なりといふも過言にあらず (1904. 7. 18 朝刊)
- ⑰. 日本人崇^{すうはい} 拝熱 (1906. 5. 31 朝刊)
- ⑱. 日本君臣の関係は祖先崇^{すうはい} 拝と密接なる連結を為し持て教育の基礎を為すと説明したり (1907. 4. 21 朝刊)
- ⑲. 本居又は平田翁などの言に據るも「神道は神より傳はれる真心」と云つてゐる。神道は又祖先崇^{すうはい} 拝である (1908. 2. 24 朝刊)
- ⑳. 處が専門崇^{すうはい} 拝の今の世の中だから患者は却て之を喜んで居るのが笑止千万である (1909. 3. 2 朝刊)
- ㉑. 地方道徳的崇^{すうはい} 拝の中心にして千葉、茨城、東京、埼玉等を初め其他全国に互れる講社 (1910. 9. 7 朝刊)
- ㉒. 其裏面には米国崇^{すうはい} 拝熱意外に猛烈にて華鄂学堂卒業生が極力運動して日本教師を排斥する様 (1911. 7. 5 朝刊)
- ㉓. 墨西哥に於ける革命的叛徒は矢張りレース将軍崇^{すうはい} 拝者にして、此等の徒はマデロ大統領を倒して (1911. 12. 2 朝刊)
- ㉔. 日本人の血管の中には恐ろしく罪惡崇^{すうはい} 拝の血が流れて居ることが是れでも知れる (1912. 6. 18 朝刊)

用例⑱のように、新聞記事における「崇拝」は1899年に字音「スウハイ」として出現した。これは国語辞典の登録よりやや遅れているが、ここに挙げていない用例を合わせてみてもほとんどに「スウハイ」が用いられるようになった。従つて、新聞記事における「すうはい」読みは明治末期に定着したと言えよう。

6. 「崇」の読みの推移について

上記の考察によつて、なぜ辞書に収録されている「崇拝」と、新聞で使用される「崇拝」との読み方の定着時期にこのような差があるのであろうか。その理由として、新聞は明治の新しい時代の潮流に合うように新しい読み方を求める作用があるため、「す

うはい」が当時の人々に受け入れられたのではないか。森岡健二（1991）は、明治期における呉音・漢音・唐音・慣用音の間の音の推移が頻繁に行われる現象があったことを詳しく論述している。

ここでは、「崇」の読みはどのように推移してきたかを考察するために、沖森卓也が編集した『五十音引き漢和字典』（三省堂 2014）における「崇」の漢字音を調査し、その詳細を次に引用する。

崇

音 スウ^漢・ス^慣・シュ^呉・ソウ^漢^呉

訓 あがめる・とうとぶ・たかい

たちなり

形声 山+宗（氏族団結の中心となるみたまや）音。一帯の中心となる山の意から、たかい意を表す。

意味 ① たかい。山がそびえているさま。「崇岳」

② とうとい。とうとぶ。あがめる。尊敬し重んじる。「崇敬・崇高・崇拝・崇奉・尊崇」

「崇」（スウ）は、前出の『広漢和辞典』には慣用音として認定されたことに対して、『五十音引き漢和字典』には、漢音として記されている。沖森卓也編の辞書記述によると、「崇拝」は最終的に漢音「スウハイ」に定着したことが分かる。勿論、「崇」に関わる字音が交替する現象は「崇拝」一語に限らず、崇敬（ソウケイ→スウケイ）、尊崇（ソンソウ→ソンスウ）、崇信（ソウシン→スウシン）、崇高（ソウコウ→スウコウ）などの語にも顕著に反映されている。

7. おわりに

「崇拝」は、最初にモリソン『英華字典』に Worship の訳語として登場している。それ以降、「崇拝」はウィリアムス、メドハースト、ロブシャイトの『英華字典』にも収録されたことから、Adore と Adoration の訳語として定着したと見られる。一方、英華字典の訳語を活用して編纂された『英和对訳袖珍辞書』には「Adoration, 崇拝」の訳語が確認できたため、漢語「崇拝」は英華字典を経由して日本に入ってきたものであると考えられる。ただ、当時「崇拝」の読みはすぐ定着せず、最初「ソウハイ」と読まれ、後に「シウハイ」と「スウハイ」の読み方が加わっている。時代の流れに伴い、辞書における「崇拝」の読み方は漢音「スウハイ」読みへと集約され、70年代以降ようやく定着したのであろう。一方、新聞雑誌における「崇拝」の発音は、辞書とかなり異なり、20世紀初期からすでに「スウハイ」が用いられていたため、いち早く当時の人々に受け入れられたことが想像される。やはり、このような字音表記の揺

れは明治期における一大現象であり、新しい時代を感じさせる語へと変化したからであろう。

【注】

- (1) 中田祝夫『国語学辞典』「慣用音」国語学会編 1980
- (2) 森岡健二『改訂近代語の成立・語彙編』 明治書院 1991
- (3) 佐藤亨『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』 明治書院 2007
- (4) Williams『英華韻府歴階』との一致=2.0%、Morrison『華英・英華字典』（英華の部との一致=3.5%に対して、Medhurst『英漢字典』との一致=9.8%である。
- (5) 台湾中央研究院英華字典資料庫 <http://mhdb.mh.sinica.edu.tw/dictionary/enter.php>
- (6) ロブシャイト『英華字典』は井上哲次郎に利用・翻刻され、たくさんの訳語はそのまま『増訂英華字典』に受け継がれている。
- (7) 飛田良文・惣郷正明編『明治のことば辞典』 東京堂 1986

【付記】

本稿は2019年度広西高校中青年教师科研基礎能力提升項目の研究費補助金(課題番号 2019KY0088)と2019年度広西師範大学博士科研研究費補助金(課題番号 2019BQ25)の研究成果の一部である。